

6

特集 肥満と外科治療

肥満外科総論 —世界的動向と日本の現状—

太田正之¹⁾，北野正剛²⁾

1) 大分大学 医学部 第一外科
2) 大分大学 医学部 第一外科 教授

肥満症に対する外科的治療，とくに肥満外科手術は，体重の減少，肥満関連健康障害の改善をもたらし，最近では生命予後の改善も報告されてきている。それに伴い，欧米諸国では，医療保険で肥満外科手術を認めており，現在肥満外科手術は，世界中で急速に増加している。本稿では，肥満症に対する外科的治療の種類を概説するとともに，世界，アジアならびに日本の現状について解説したい。

肥満症に対する外科的治療の種類

肥満症に対する外科的治療としては，広義には内科的治療以外のものをすべて含むため，肥満外科手術だけでなく，内視鏡的治療も含まれる。しかし，内視鏡的治療はその高率なりバウンドからそれほど行われておらず，肥満外科手術，とくに腹腔鏡下肥満外科手術が主として行われている。

外科的治療

外科的治療は，その機序により，摂食量の抑制，消化吸収能の抑制，ならびにその両者の組み合わせに分類される。摂食量を抑制する手術術式には腹腔鏡下調節性胃バンディング術，スリーブ状胃切除術，垂直遮断胃形成術があり，消化吸収能を抑制する術式には胆膵バイパス術，両者の組み合わせの術式には腹腔鏡下Roux-en-Y胃バイパス術がある。各術式の模式図は，本特集2章「肥満症治療における外科的治療の位置づけ：外科医の視点より」の図1を参照してほしい。

内視鏡的治療

それに対し，内視鏡的治療には，摂食量を抑制する方法として内視鏡的胃内バルーン留置術や内視鏡的胃形成術が，また消化吸収能を抑制する方法として内視鏡的十二指腸-空腸バイパススリーブ術が報告されている(図1)¹⁾。ただし，内視鏡的胃内バルーン留置術以外の内視鏡的治療は，海外でも臨床研究の段階であり，そのデバイスの入手は困難な状況にある。

世界における肥満外科手術の現状

手術数の急速な増加

国際肥満外科連盟(the International Federation for the Surgery of Obesity and Metabolic Disorders: IFSO)は，5年に1回のアンケート調査を行っている。1998年に世界で年間4万例であった肥満外科手術が，2003年には14.6万例となり，2008年には34.4万例となっていた^{2,3)}。つまり，2008年には10年前の8.6倍，5年前

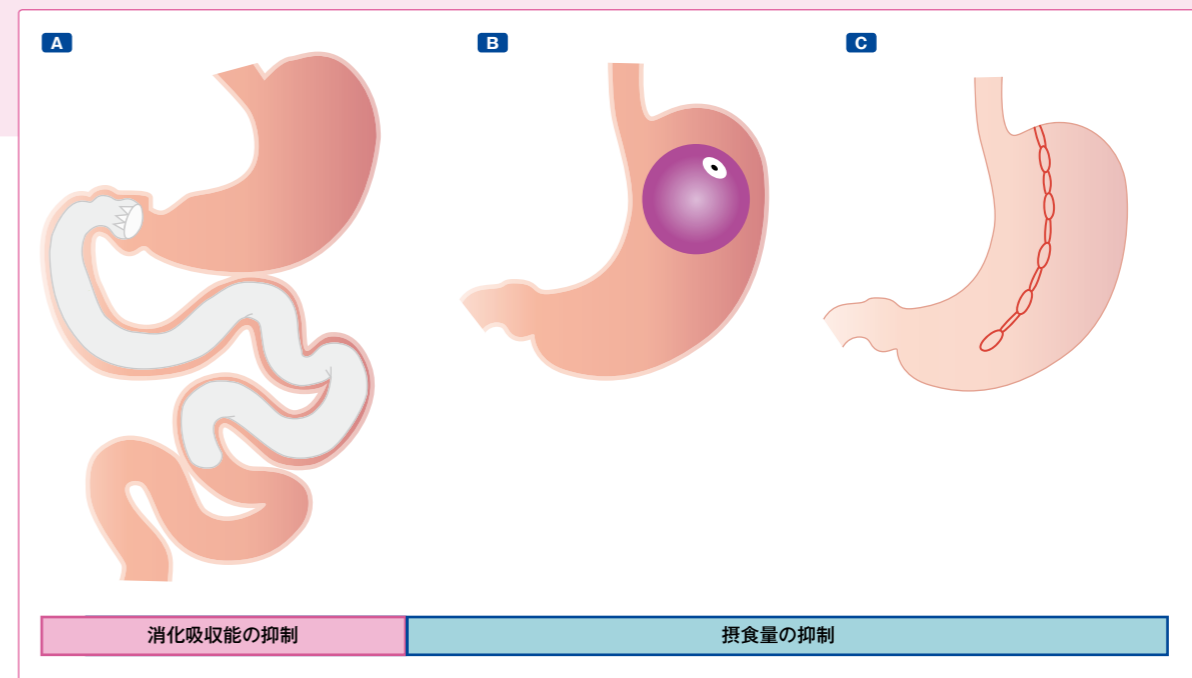


図1 肥満症に対する内視鏡的治療

A: 十二指腸-空腸バイパススリーブ術 / B: 内視鏡的胃内バルーン留置術 / C: 垂直遮断胃形成術

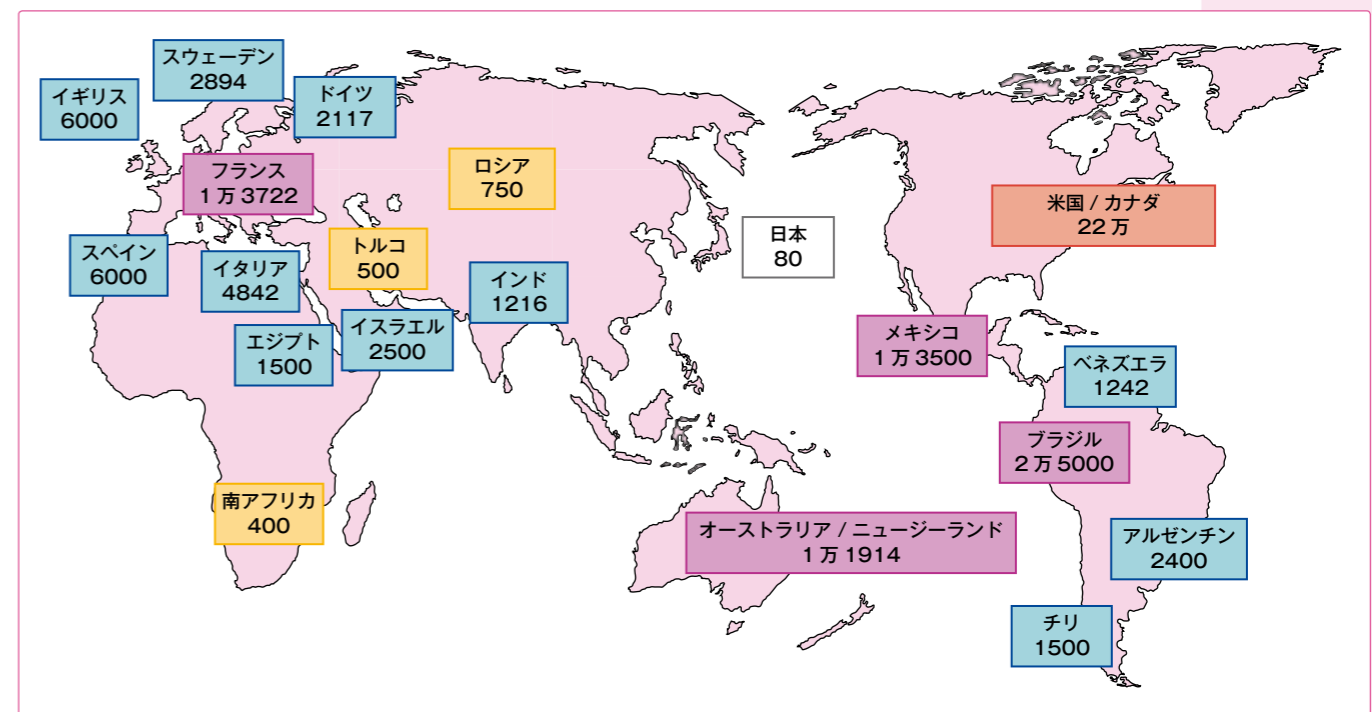


図2 2008年に世界の主要国で行われた肥満外科手術の症例数(文献3改変)

の2.4倍の肥満外科手術が世界中で行われたことになる。最近の肥満外科手術の急速な普及が伺える。世界の主要国の手術症例数を図2にまとめた。2008年には米国/カナダでは22万例の肥満外科手術が行われ，ヨ-

ロッパの主要国では各2000例以上，ブラジル2万5000例，オーストラリア1万1900例，メキシコ1万3500例であった。